

沈佺期の生涯と文学

高木重俊

一
沈佺期は宋之間とともに「沈宋」と並称される初唐の宮廷詩人である。彼らは武后・中宗の兩朝を中心に活躍し、元稹「唐故工部員外郎杜君墓係銘」にも「沈宋の流、研練精切にして、声勢を穩順にし、これを謂ひて律詩と為す」と記されるように、律詩の成立に大きく寄与したことで知られる。彼らの場合、宮廷詩人「沈宋」すなわち律詩の成立、という図式で捉えられるのが普通である。

『全唐詩』における沈佺期と宋之間の詩の伝承上の重複は、「芳樹」「巫山高」「折楊柳」など樂府題の作品を中心として十二首にもぼるが、これらはすべて五言八句から成る作品であり、それが沈佺期の作とも宋之間の作とも伝えられることは、彼らの詩風の類似性を示すとともに、彼らが律詩の成立に多大の貢献をしたという後代の詩の伝承者の認識をも反映している。

しかし、律詩成立への貢献という文学史上の功績は認め

るべきであるとしても、彼らは律詩を形式上完成させたに過ぎないのであって、彼らのみずからの個人的感情を律詩に仕立てあげたものではないことは、五言八句から成る十二首が、兩者いずれの作とも決定しがたい事実からも窺えるであろう。したがって、「沈宋すなわち律詩」という図式を強調しすぎると、彼らそれぞれの文学的個性を見落すことにもなりかねない。

本稿においては、沈佺期の生涯を辿りつつ、彼の文学的個性について考察するつもりである。宋之間については、稿を改めて論ずる。

二

沈佺期の閲歴に関しては、『旧唐書』『文苑伝中』・『新唐書』『文芸伝中』にそれぞれ百字程度の簡略な記述があるだけである。字は雲卿で、相州内黄（河南省内黄県）の人と記されるが、家系ならびに生年には触れない。『元和姓纂』巻七には、「もと呉興の人なり。唐の下邳の令真恠を

生み、恠 恠期・恠交・字宣を生む^(注1)とある。内黄の沈氏は、梁の沈約を出した呉興の沈氏の分派で、「下邳令(従六品上)」であった祖父の名、および父の真恠の官職は不明であるが、おそらくは下級官僚の家柄であったろう。沈恠期には「十三四時、嘗従巫峡過、他日偶然有思」・「少遊荆湘、因有是題」という詩があり、少年時代に遊んだ巫峡・荆湘地方を懐かしんでいるが、地方官であった父に従つての旅だつたと思われる。

沈恠期の生年は不明であるが、宋之問とほぼ同世代であると考えられており、宋之問の生年が高宗の顯慶元年(五六)かそれよりやや前と推定される^(注2)ところから、沈恠期もそれに近い出生と思われる。ただ、彼らは上元二年(六七五)に同時に進士に登第するが、宋之問には高宗朝に左驍衛郎将(正五品上)・弘文館詳正学士であった父の宋令文がいるという有利な条件があったにもかかわらず、次の武后朝においては、沈恠期の方が宋之問よりも官職の上でわずかに先行することから見ると、沈恠期の方が宋之問よりいくらか年長であったと考えられる。永徽元年(六五〇)あたりの出生と見るのが妥当なところだろう。

上元二年の進士及第ののち、宋之問がそうであったように、沈恠期もしばらくの間は官職を得られなかったと思わ

れる。『新唐書』本伝には彼が太常寺協律郎(正八品上)となったことが記されているが、これが官途の始まりであったのだろう。後に述べることであるが、彼は武後の聖曆元年(六九八)には通事舍人(従六品上)であり、進士及第からこの年に至る二十余年の間に、彼は協律郎という低い官職を得ただけであるから、彼はこの二十余年の間、無官・卑官に甘んじていたことになる。のちに彼は親友であった王赦なる人物の計報に接して「傷王学士」という詩を作る。その中で彼は、

憶汝曾旅食 憶ふ 汝 曾て旅食せしとき
屢空澗澗溜 屢しば澗・澗の溜に空しかりしを
吾徒禄未厚 吾が徒 禄 未だ厚からざりければ
笱斗愧相貽 笱斗も 相貽らるるを愧づ
原憲貧無愁 原憲は貧にして愁ひなく
顔回采自持 顔回は采しみて自ら持す

とうたい、貧窮のうちにも固い友情で結ばれていた王赦とのこの時期を回想している。

二十年に及ぶ貧窮の生活を脱け出し、彼は通事舍人として武後の朝に立つ。「哭蘇眉州崔司業二公」詩は、蘇味道と崔融の死を哭する神童二年(七〇七)八月の作であるが、その序には「蘇(味道)往に鳳閣侍郎に任ぜられしと

き、佺期は通事舎人を忝けなくす」とあり、蘇味道が鳳閣（中書）侍郎になったのは聖曆元年（六九八）九月であるから、このとき沈佺期は通事舎人であったことになる。久視元年（七〇〇）四月、武后は河南省告成県の石淙山に新築した三陽宮に避暑に出た。五月十九日、武后は皇太子・諸王・群臣と宴し、みづから七言八句の詩を作り、宴に侍する者に唱和させた。唱和者は次の通りである。^{（注3）}

皇太子李顯（中宗）・相王李旦（睿宗）・梁王武三思・内史狄仁傑・奉宸令張易之・麟台監張昌宗・鸞台侍郎李嶠・鳳閣侍郎蘇味道・夏官侍郎姚元崇・給事中閻朝隱・鳳閣舎人崔融・奉宸大夫薛曜・守給事中徐彦伯・左奉宸内供奉楊敬述・司封員外于季子・通事舎人沈佺期
彼らは武后朝における名だたる権貴・詞人である。群臣名の配列は品階の高低による。通事舎人沈佺期の名が末席に見えているが、このとき彼は初めて皇帝の主催する詩宴に登場したわけである。彼の詩は次の通りである。

金輿且下綠雲衢　　金輿　且あしたに下る　綠雲ちまたの衢
綵殿晴臨碧澗隅　　綵殿　晴れて臨む　碧澗の隅
溪水冷泠雜行漏　　溪水は冷泠として行漏に雜はり
山煙片片繞香炉　　山煙は片片として香炉を繞る
仙人六膳調神鼎　　仙人の六膳は神鼎に調せられ

玉女三漿捧帝壺　　玉女の三漿は帝壺に捧ず
自惜汾陽紆道駕　　自ら惜しむ汾陽に道駕を紆まぐるを
無如太室覽真圖　　太室にて真図を覽るに如くはなし
この作品は他の唱和者のものと同じく、三陽宮ならびに賜宴のありさまを仙境に見立てている。尾聯は、帝堯が藐姑射山で四神人に会った帰途、汾水の北で天下を治めることを忘れてしまったという『莊子』「逍遙遊」の話を下敷きに、わざわざ汾陽に出掛けなくても、隣の嵩山の太室峯で五岳真形図を見ることができると言う。武后はこれより四年前の万歳登封元年（六九六）に嵩山に封禪していた。この作品は沈佺期の現存する最初の応制詩であり、きわめて裝飾性に富んだ律体である。この石淙の宴に招かれたことにより、彼は宮廷詩人として認知されたと言っている。

この時期、宮中では張易之・昌宗の兄弟が武后の厚い寵遇のもとに放縱の限りを尽くし、武承嗣・武三思ら武氏一族までも彼らに佞事していた。武后はこうした醜聞を蔽い隠すために、この年の六月、張昌宗・李嶠を修書使に任じ、閻朝隱・徐彦伯・薛曜・于季子・宋之問・張説ら二十一人の文学の士を動員して、『三教珠英』の編纂に当らせた。沈佺期もこれに参画している。『旧唐書』「宋之問伝」

に「三教珠英を修むるに預り、常に扈從遊宴す」と記されるように、編纂事業に動員された人々は、武后や張兄弟・武氏一族らと遊宴飲楽に耽るのである。五月の石淙の賜宴に参列していなかった司礼主簿（從七品上）の宋之間は、六月に左奉宸内供奉を兼ね、『三教珠英』の編纂に預ることになって、宮廷詩人として登場する。

長安元年（七〇一）十月、武后は西京長安に行幸し、満二年にわたって長安に滞在した。沈佺期もそれに随行し、「辛丑年十月上幸長安時扈從西嶽作」「初冬從幸漢故青門扈制」「扈從出長安扈制」などの五言の長篇詩を残している。

長安二年（七〇二）、沈佺期は考功員外郎（從六品上）として、貢挙を知した。その際の進士が張九齡と徐秀である。『登科記考』巻四「長安二年」の条では、

（張九齡）弱冠鄉試進士、考功郎沈佺期尤所激揚、一挙高第。時有下等、謗議上聞。中書令李公（李嶠）、當代詞宗、詔令重試。再拔其萃、擢秘書省校書郎。（徐浩）「唐尚書右丞中書令張公神道碑」

（張九齡）曲江人、長安二年進士、調校書郎。（晁公武）『郡齋讀書志』卷十八）

（徐秀）年十五、為崇文生、応挙。考功員外郎沈佺期

再試「東堂壁画賦」。公援翰立成、沈公駭異之、遂擢高第。（顔真卿）「朝議大夫贈梁州都督上柱国徐府君神道碑」という資料によって、それを証している。

張九齡は開元中に宰相となる人物で、前年の知貢挙であった張説の推輓があつたとは思われるものの、「謗議」に臆することなく、再試にも張九齡を拔萃した沈佺期の目は確かであつたと云つてよからう。

長安三年（七〇三）春、沈佺期は給事中（正五品上）に転ずる。『唐尚書省郎官石柱題名考』巻十一「考功員外郎・沈佺期」の条には、

案、沈雲卿集作寄北使詩并序云、長安三年、自考功郎中押給事中、明年献春下獄、被放南荒云云。

とある。この「寄北使詩并序」という作品は『全唐詩』には見えない。「夜泊越州逢北使」という詩は現存するが、これには序がない。しかし、「哭蘇眉州崔司業二公」詩序には「崔（融）重ねて鳳閣舎人と為るや、佺期また給事中に遷る」とあり、崔融が再び鳳閣舎人になったのは長安二年のことであるから、沈佺期が長安三年春に給事中に押したという、「寄北使」なる詩の序の記述とはほぼ符合する。

また、彼が考功員外郎ではなく考功郎中であつたという「寄北使」詩序の記述は、彼の「自考功員外授給事中」とい

う詩題を、一本に「自考功郎中拜給事中」に作るとする『文苑英華』卷一九〇の側注とも関連するが、前引の顔真卿「徐府君神道碑」によつて考功員外郎とするのが自然であろう。沈佺期は武后期において、協律郎・通事舎人・考功員外郎・給事中と順調に昇進した。一方、詞人としても、『旧唐書』「武崇訓伝」に、長安三年に皇太子（中宗）の娘の安樂郡主が武崇訓に降嫁したおり、父の武三思は宰相の李嶠・蘇味道、詞人沈佺期・宋之間・張説・閻朝隱らに命じて、「花燭行」を賦して賛美させたと記す通り、第一級であると認められていた。出身から見れば宰相の地位に上るのは無理としても、このまま順調に推移すれば、彼にはかなりの高位が期待できたと云つてよいだろう。

三

順調に見えた沈佺期の官途は、長安四年（七〇四）春の下獄によつて一転した。考功員外郎の時期に賄賂を受けた容疑によつて収監されたのである。獄中において彼はいくつかの詩を作っているが、「被弾」と題する五言三十六句の詩は、

知人昔不易 人を知るは 昔より易からず
 拳非貴易失 非を拳ぐるとは 失ひ易きを貴ぶなり
 爾何按国章 爾 何ぞ国章に按りて

無罪見呵叱 罪なくして呵叱せらる
 平生守直道 平生 直道を守りたるに
 遂為衆所嫉 遂に衆の嫉む所と為る
 とうたい出される。続いて、幼児や弟たちまでが牢獄に収められたことを述べたあと、

効吏何咆哮 効吏 何と咆哮せる
 晨夜聞撲扶 晨夜に撲扶を聞く
 事聞拾虚証 事の間に虚証を拾ひ
 理外存枉筆 理の外に枉筆を存す
 懷痛不見伸 痛を懷きて伸びられず
 抱冤竟難悉 冤を抱きて竟に悉し難し
 と、威丈高に自白を強要し、拷問を行ない、事理を無視して罪を構成しようとする、獄吏の苛烈な訊問の状況を描写し、さらに、

窮囚多垢賦 窮囚 垢賦 多く
 愁坐饒蟻虱 愁坐 蟻虱 饒し
 三日唯一飯 三日に唯だ一飯
 兩旬不再櫛 兩旬に再びは櫛らず
 是時盛夏中 是の時 盛夏の中
 曠赫多瘵疾 曠赫 瘵疾 多し
 睜目眠欲閉 目を睜らんとするも眠りて閉ちんと欲

暗鳴氣不出 暗鳴いんせうとして 氣 出でず

と、真夏の獄中で氣息奄々たる日々を送る自己のありさまを述べる。凄酸を極める獄中の情景が、リアルで迫力に富んだ筆致で描かれているのである。

また、「移禁司刑」は、初秋に大理寺の獄に移された時の作品で、五言四十八句にのぼる長篇であるが、その中では、

埋劍誰当弁 埋劍 誰か当に弁ずべき

偷金以自誣 偷金 以て自ら誣ふ

誘言雖委答 誘言 答ふるを委ねんとすと雖も

流議亦真符 流議 亦た真符す

と、自己の冤罪を晴らす手だてのないこと、衆人の無責任な証言によって自己の罪状が構成されて行くありさまを述べ、さらに、

累餉唯妻子 餉を累ぬるは唯だ妻子

披冤是友于 冤を披くは是れ友于

物情牽倚伏 物情 倚伏に牽かれ

人事限榮枯 人事 榮枯に限らる

門客心誰在 門客 心 誰か在る

鄰交迹倘無 鄰交 迹 倘たち無し

と、冤罪に苦しむ自分を友人は助けてくれず、門客も隣人も窮地に立つ自分から離れて行く現実を嘆く。自分の冤罪を構成する「虚証」としての「流議」も、彼ら親交の口から出たものかも知れないと思うとき、沈佺期は「倚伏」「榮枯」によって転変する人情の真実の姿を見せつけられたことになる。

彼は「枉繫」其二でも、「我に毫髮の瑕きずなし、苦心 氷雪を懐く」と言う。苛酷な獄中生活で孤立感に苛まれる彼の心は、「冰雪」のように凍てついているのである。彼の獄中における作品は、このほか「同獄者嘆獄中無燕」「獄中聞駕幸長安（注4)」二首などがある。

さて、沈佺期は罪状を確定されないままに神竜元年（七〇五）正月を迎えた。下旬、高齡の武后は重病に陥り、これを機に、張柬之・崔玄暉・桓彦範らが左右羽林兵を率いて宮中に乱入し、張兄弟を誅殺した。二十五日、中宗が復辟し天下に大赦したが、張兄弟の党与は赦さなかった。二月初め、武后政権を支えていた宰臣姚元之・韋承慶・房融らが嶺南に流された。続いて、李嶠・蘇味道・崔融・鄭愔らも左遷された。嶺表に流された宮廷詩人の名は、王無競（廣州）・宋之問（澠州）・閻朝隱（崖州）・杜審言（峰州）・沈佺期（驩州）の五名がわかっている。

張兄弟のために詩の代作をし、「溺器」まで奉じた閩朝
隱や宋之間に比べ、張兄弟への阿附の度合いが比較的軽い
と思われる沈佺期が、五人の中で最も遠い驩州（今のベト
ナムのビン市付近）に流されたのは、前年の収賄容疑が加
算されたためであろう。

彼らが洛陽を出たのは二月中旬と思われるが、彼らの旅
程と経路はそれぞれにずらしてあった。宋之問と杜審言は
江州（九江市）・洪州（南昌市）と南下して大庾嶺を越え、
沈佺期は「神龜初、麋逐南荒、途出榔口、北望蘇耽山」と
いう詩題が示す通り、洞庭湖から湘江を溯り、郴州を経て
宜章県の南で南嶺を越えた。そして韶州（韶関市）で大庾
嶺から至るルートと合流し、北江を下って広州に入ってい
る。

ところで、「宋之問集」には「自衡陽至韶州謁能禪師」
という五言三十句の詩がある。この詩は、春の季節に流謫
の旅にある作者が、衡陽から湘水を溯り、南嶺を越えて韶
州に至り、師と仰ぐ能禪師に会ったことを述べるが、安東
俊六氏は、この詩を宋之問の作ではないと論証しておられ
る。^{（注6）}この見解は正しいが、この詩が誰の作品であるかにつ
いては、氏に議論がない。

この詩に記されたルートは、沈佺期の流謫の経路と一致

する。宋之問と杜審言は大庾嶺を越えて韶州に至って
り、王無兢は広州への旅の途中に広州の西の端州（高要県）
に出ているから、^{（注7）} 桂州經由で桂江を下って端州に至って
ると思われる。ただ、閩朝隱の経途は不明である。また、
この詩には「願以有漏軀、聿薰無生慧」という句がある
が、これは沈佺期の驩州における「紹隆寺」詩の「試将有
漏軀、聊作無生觀」の句と同じ発想に基づいて作られてい
る。さらに本稿の冒頭で述べたように、沈佺期と宋之問の
詩の伝承上の重複は多数にのぼっている。これらを総合し
て、「自衡陽至韶州謁能禪師」詩は沈佺期の作であると見
るのが妥当であろう。

この詩では、仏法に帰依して「有漏」（煩惱）を消し去
り、「無生」の悟りに至りたいと述べたあと、

宗師信捨法 信捨の法を宗師とし

擯落文史芸 文史の芸を擯落せん

坐禪羅浮中 羅浮の中に坐禅し

尋異窮海裔 異を尋ねて海裔を窮めん

何辞禦魑魅 何ぞ辞せん 魑魅を禦するを

自可乘炎癘 自ら炎癘に乗ずべし

.....

不作離別苦 作さじ 離別の苦しみを

婦期多年歳 婦期 年歳 多からん

とうたう。仏の教えに頼り、立身の支えであった「文史の芸」をも無縁のものとして捨て去り、従容として荒外に赴こうとする沈佺期の心情があらわれている。「赦されて帰浴できる日ははるか先だろう」と述べる彼は、すっかり観念しているように見えるが、かつて獄中で官僚社会の悪意を痛烈に被り、「冰雪を懐いた」彼の心は、引き続き流滴の旅の中で、容易に溶けることがないのである。

宋之間は瀧州に至る旅の途中で、「羣議宿心に負き、戻を光華の始めに獲たり」(「自洪府舟行直書其事」)、「皇明 頗る照洗せられしに、廷議 日に紛惑す」(「早発大庾嶺」)のように、自分を流罪とした「羣議・廷議」の悪意を憤る一方、「生還 倘し遠きに非ずんば、誓って恩徳に酬いんと擬す」(同上)、「祇だ応に忠信を保ち、延促 神明に付かん」(「入瀧州江」)のように恩赦を願う恭順の姿勢を見せるなど、動揺する心を隠せないでいる。それに対して沈佺期の場合、異域を旅する苦難と不安はしばしばうたわれるものの、自分をこのような境遇に追いやって「流議」への憤りはほとんど影をひそめている。

この沈佺期は、鬼門関(広西壮族自治区北流県の南)を通り、トンキン湾を船で横断して交州の竜編に至り、さ

らに南下して驩州に到達する。「入鬼門関」「発平昌島」「度安海入竜編」「初達驩州」二首などがその道行きを示す。

彼が驩州に着いたのは五月ごろのことと思われるが、そのとき彼は「流子 一十八、予に命ぜられしは偏に不偶なり」(「初達驩州」)とうたった。十八人の流人の中で自分だけが不釣り合いな処分を受けたとは、最も長い旅路の果ての実感であったろう。加えて、彼は妻子を洛陽に残し、二人の弟も剣外(蜀)・荆南にと左遷されて、家族すべてが別離を強いられているのである。しかし彼は約一年に及ぶ驩州滞在の間、つとめて平静にふるまおうとした。

彼は身にふりかかった不幸を宿命であると諦観しようとする。「昆弟 推さるるは命に由り、妻孥 割かるるは縁に付す」(「度安海入竜編」)、「戚属は胡越に甘んじ、声名は糝糠に任す、由来 命を憤るを休む、命や信に蒼々たり」(「答魍魅代書寄家人」)というように。この姿勢は彼を仏教の世界へと引き寄せた。「紹隆寺」では、

吾従釈迦久 吾 釈迦に従ふこと久しく

無上師涅槃 無上 涅槃を師とせり

探道三十載 道を探ること三十載

得道天南端 道を天の南端に得たり

非勝適殊方

起誼婦理難

放棄乃良縁

世慮不曾干

勝へて殊方に適くに非ざれば
誼に起り理に帰すること難からん

放棄せらるるは乃ち良縁

世慮にも曾て干されず

とうたう。南荒に投棄されたことが悟道の良縁になったとは、衷心からの言葉としてそのままに信ずることはできないが、「九真山淨居寺謁無礙上人」でも「因縁の理を究めて、聊か放棄の慚を寛くせんと欲す」と述べるように、仏教の超越の理と寺院の清淨な趣きが、彼の流竄と別離の悲哀を和らげてくれたであろうことは想像に難くない。宋之問にも寺院を題材とする詩が多くあるが、それらは寺院の嚴肅で清淨なたたずまいの描写に力点が置かれており、宋之問に比べると、沈佺期の作品の方が内省的であると言

い得る。
日南の亜熱帯の山水も彼の心を慰めるもののひとつであった。彼は驪州城内の役宅から山間の水亭に移住し、閑に乘じて漁舟を操り、また、山歩きを楽しんだ。「従崇山向越常」詩では「豈に徒だに怪異を探るのみならんや、聊か帰心を緩うせんと欲す」と、山歩きの目的を語っている。

しかし、こうした内的努力にもかかわらず、彼の帰心は時とともに募った。年が改まり、春を迎えた彼は、「驪州

南亭夜望」で、

昨夜南亭望

分明夢洛中

室家誰道別

兒女案嘗同

忽覺猶言是

沈思始悟空

肝腸余幾寸

拭淚坐春風

昨夜南亭に望み

分明に洛中を夢む

室家誰か別れを道ふ

兒女案嘗て共にせり

忽と覺めて猶ほ是と言ひしも

沈思して始めて空なるを悟る

肝腸 余すこと幾寸ぞ

涙を拭ひて春風に坐す

とうたっている。洛陽を発つ朝、家族の誰も別れの言葉とてなく、いたいけな子供たちとともにした最後の食卓。あの時の張り裂けんばかりの悲しみが驪州の夢に蘇ったのである。

三月三日、彼が「人の炉酒に対するものなし、寧ぞ郷を去りし憂ひを緩くせんや」(「三日独坐驪州思憶旧遊」)とうたったその月に、待望の恩赦の知らせが届いた。第一報はおそらく処州(浙江省麗水県)刺史の寧某からの書状であった。「喜赦」詩には「去歲 荒に投せられし客、今春 甯を肆されて帰る、……、還た合浦の葉と將に、俱に洛城に向ひて飛ばん」と、跳び上らんばかりの喜びが溢れているが、しかし一方では、「質は幸ひに恩もて先づ貸さるるも、

情は狐にして枉は未だ分わかかならず、自ら憐れむ涇渭の別を、誰か与たに明君に奏せん」(「答寧処州書」詩)と、心中にわだかまる冤罪への怒りを吐露している。

しかし、朝廷からの詔書には彼を台州(浙江省臨海県)の録事参軍事(従七品上)に移す旨が記されていた。洛陽への帰還はかなわなかったのである。彼は「赦到不得帰、題江上石」詩で、「墳壠 謁するに由なし、京華 豈に重ねて躋ねらんや、炎方 誰か広しと謂ふ、地尽きて天の低きを覚ゆ」と、失望の心情をうたい、「翰墨に諸季を思ひ、裁縫に老妻を憶ふ、小児は応に褌を離れたるべし、幼女は未だ笄ひを攀ひかざらん」と、対面かなわぬ諸弟や妻子への思慕の心を述べる。まことにしみじみとした家族への情愛がうかがわれる。

ともあれ、沈佺期は台州に向けて出立した。「峡山寺賦」は端州の峡山寺での作であるが、その序には「神竜二年夏六月、予 南裔に投棄せられしも、恩を承けて北帰す」とある。これからすると、驩州を出たのは四月ごろであったろう。彼は前年春に通った道を逆にたどり、七月に韶州から郴州に至る。「自昌樂郡泝流至白石嶺下行入郴州」では、「濯溪 寧ぞ懼るるに足らん、磴道 誰か悪しと云はん、我 山水の間を行く、湍險も皆若かず、安んぞ能く独り見

聞するのみならんや、此を書して京洛に貽らん」とうたう。白石嶺を越えれば嶺南とは訣別できるわけで、急流も險阻も物とせず旅を続ける沈佺期の、勇んだ鼓動が伝わってくる。また、この峡谷の風景を叙して京洛の人士に贈ろうという言葉に、詞人の魂の復活を感じることができよう。

八月に潭州(長沙)に着いた彼は、引き続き台州への路をたどった。この年の十月、中宗は長安に帰り、名実ともに長安が国の中心となった。

おそらく景竜元年(七〇七)のことであろうが、沈佺期は台州の計簿を携えて上京し、中宗の召見を受けた。彼はかつて武后の石淙山の賜宴のうちに、皇太子であった中宗と参列して詩を唱和しており、中宗も沈佺期の詞人としてのその後の活躍を知っていたところから、ただちに彼を起居郎(従六品上)とした。沈佺期は足かけ三年ぶりに朝官に復したことになる。一方、宋之間は、流謫地の澠州に着いて約半年ののち、逃帰して洛陽の張仲之の家に潜み、王同皎・張仲之らの武三思打倒の計謀を密告し、神竜二年三月に鴻臚寺主簿(従七品上)となり、やがて戸部員外郎(従六品上)に転じた。驩州・台州での任を全うした沈佺期は、中宗の朝において、再び宋之間と肩を並べることにな

ったのである。

四

中宗は文学好きの君主であった。彼は婕好の上官婉児の勧めに應じて修文館に学士を増員し、宰臣・詞臣をそれに充てた。『唐会要』卷六四「史館下」によると、景竜二年（七〇八）四月に李嶠・宗楚客らが大学士に、五月に杜審言・宋之問らが直学士に、十月に趙彦昭・沈佺期らが学士に任じられている。彼ら^(注9)修文館学士は、中宗が禁苑や宗戚・大官の邸宅などに遊幸するたびに、随行して詩を賦した。上官婕好（のち昭容）がそれらの詩を品第し、優れた者には金帛を下賜した。

沈佺期も学士のひとりとして宴集に加わり、座主を賛美するかつての宮廷詩人にもどった。この年の十二月晦日の宮中における大宴楽のおり、彼は「宜しく歳酒を將て神薬を調すべし、聖祚 千春 万国の朝」（「守歳侍宴应制」と、中宗の長命安泰を寿いでいる。

彼は下獄・配流の過去を生々しく語ることをしない。「再入道場紀事应制」^(注10)は、道場（皇城内にあった紅樓院という寺院）の祭祀に参列した時の七言律詩である。冒頭「南方より帰去して再び天に生ず、内殿 今年 昔年に異なる」とうたい出され、続いて仙界さながらに道場の情景

が描かれ、「自ら喜ぶ 深恩もて侍従に陪し、兩朝 長く聖人の前に在るを」と、武后・中宗の兩朝に出仕する喜びを述べてこの詩は結ばれる。詩中の「南方」云々は、嶺南における自己の苦渋の回顧を含むものではなく、久しぶりに道場に入ったことの単なる事情説明にすぎない。また、景竜三年二月の宴で作られた六言絶句「回波詞」は、「回波 爾時 佺期、嶺外に流されて生きて帰る、身名は已に齒録を蒙るも、袍笏には未だ牙緋を復せず」とうたわれる。官籍は回復されたが、五品以上の人が持つ象牙の笏と四・五品の着衣である緋衣はまだ回復されていないと言う沈佺期に、中宗は兩者を賜わったという。沈佺期は武后朝では正五品上の給事中であった。『新唐書』本伝ではこの「回波詞」を「辞を弄して帝を悦ばしめ」たものと評するが、南方流謫の過去も、ここでは中宗を喜ばせるおねだりの道具となっている。

彼は宮廷詩人として多くの应制詩を残しつつ、睿宗朝を過ぎ、玄宗の開元元年（七一三）まで生きる。その間、任官の年月は特定できないが、中書舎人（正五品上）・太府少卿（従四品上）・太子少詹事（正四品上）と、順調に昇進している。宋之問が太平公主と安樂公主の党争のさなか、太平派から安樂派に乗り替え、太平公主に憎まれて越

州長史に左遷され、玄宗の即位とともに嶺南の欽州に再流謫されて死を賜わったのに比べると、沈佺期は終りを全うしたと言える。彼が最後の官である太子詹事を授けられた時の詔は蘇頌が書いた。その中では沈佺期を「早に多士の行ひを升せ、独り詞人の律を擅にす」(「授沈佺期太子少詹事等制」)と評しているが、これが当時の一般の評価であつたらう。

五

宋之問が自己の上昇志向にまかせて積極的に行動する傾向を持つのに対して、沈佺期は控え目な人柄で、与えられた場をよくわきまえる人物であつたと言える。ただし、その場とは、彼が驩州において「顔を款よばすは侍従に因り、武あを接するは文章に在り」(「答魍魅代書寄家人」)と誇らしげに述べたように、宮廷であつたことは言うまでもない。彼は宮廷詩人として座主のために詞を献ずるが、宋之問のように度を過ぎて権倖に媚び、権力者を乗り替えるようなことはしなかつた。彼は宮廷という至上の場に奉仕し、官僚として立つよりも「詞人」として生きることを天職と心得ていたのである。したがって、下獄・流謫という個人的な不幸な体験は、つきつめれば人間の普遍的な問題につながるものであつたにもかかわらず、彼はいともたやすくそ

の過去を語ることを放棄したのである。

彼は獄中に拘禁され、苛烈を極める獄吏の訊問、虚証をもとに罪が構成される現実、榮辱によって転変する人情の冷酷さを具さに体験し、虚飾を払つたリアルな筆致で長篇の詩に仕立て上げた。彼の下獄より二十五年ほど前、駱賓王も賊に坐して投獄され、「獄中書情通簡知己」(「在獄詠蟬」)「憲台出繫寒夜有懷」などの詩において人間不信をうたっているが、典故を多用した極めて晦渋な表現であり、沈佺期の獄中詩が持つ平明で迫真性を備えた表現には及ばない。とは言え、獄中詩の系譜なるものをたどろうとすれば、第一級の詩人の作品として、彼らの獄中詩は大きな比重を占めるだろう。

次に、嶺南地方を題材とする詩の持つ意味について考えてみよう。古来、とりわけ健康を首都とした南朝の時代を主として、嶺南に足を踏み入れて異質の風土を描写した詩人は多い。しかし、唐の神竜の政変によって多くの一流詩人が嶺南に流謫されたのは、空前の事件であつた。彼ら流謫の宮廷詩人はそれぞれに異境の思いを詩に託したはずであるが、沈佺期と宋之問にそれぞれ約二十首があるほか、杜審言に二首が残るのみである。ただ、宋之問は二度嶺表に流されており、兩回を合計した数である。沈宋兩人の作

品の残存数が多いのは、彼らの詩人としての名声の高さによるだろう。『旧唐書』『宋之問伝』では、彼の流謫中の作品が遠近に伝布したと記す。これは、彼の作品が流謫された地方の情報を提供するという側面を持っていたことを示す。また、明の楊慎の『升菴詩話』巻一〇「崇山」の条には、そのかみ驩兜が流された崇山は従来湖南の地にあるとされていたが、沈佺期の「従崇山向越裳(常)」詩および序によれば、崇山は交州・広州の域にあったことがわかる、と述べている。このような読み方は、沈佺期の同時代の人々にも共通するだろう。唐室は遠くベトナムの地まで版図に収め、中央から官僚を派遣して統治しているとは言え、僻遠のこの地域の人文・自然に関する情報はいまだに薄いものであった。沈佺期や宋之問の嶺南詩は、嶺南の情報を伝達するものとして中央に迎えられたのであった。

玄宗朝の人である任華は桂州刺史参佐として桂州にあり、王事のゆえに三万里余の道程を往復する親友の宗袞を送別する席で、桂州の神秘的な風景を叙して、「中朝の群公、豈に遐荒の外に是の如き山水あるを知らんや」(「送宗判官歸滑台序」と述べている。この言は、辺境に難渋する下級官吏の苦衷を包蔵した、屈折した訴えである。辺境の官吏任華の思いは、同じ辺境に流謫された沈佺期や宋之

問のそれにも重なるだろう。彼らが嶺南の風物を好悪の心情を織りまぜて描くとき、彼らの脳裏にある「中朝」は極めて大きな存在であったに相違ない。彼らの嶺南詩は、中朝の群公に対して、異域に難渋する彼ら自身の姿をアピールする、いわば存在確認の申請書でもあったのである。ただ、嶺南の風物を唯美的に、また、おどろおどろしく描く傾向は宋之問の方が強く、沈佺期の作品は平淡で、かつ、内面的な記述が多い。両者の性格の反映であると言っている。

沈佺期の豊かな感受性と詩的才能は、下獄と流謫とによって新しい展開を示したかに見えた。非運への嘆き、人間に対する懷疑、そして肉親への深い情愛など、人間の持つ普遍的感情が詩中に結実したのである。宮廷詩人として復帰することがなかったならば、彼はこれらのテーマをそのまま詩に刻みつけたかも知れない。しかしまた、宮廷詩人として復帰して名を成すことがなかったならば、彼の獄中・嶺南の詩が今に伝わる可能性は少なかったであろう。文学が個人の手にゆだねられ、それを正当に評価しようとする文学観が普遍化する、しばらく前の時代であったからである。

〔注〕

- 1、『新唐書』「沈佺期伝」には、弟の名をそれぞれ全交・全宇に作る。
- 2、傅璇琮「盧照鄰・楊炯簡譜」(『楊炯集・盧照鄰集』所収、一九八〇年十一月、中華書局)による。
- 3、『全唐詩』卷四六、狄仁傑の「奉和聖製夏日遊石淙山」詩の側注による。この時の作者名と作品は、薛曜の書によって北壁上に刻まれたとある。
- 4、武后は長安四年以後、長安には行幸していない。この作品は獄中における風聞にもとづくものであろう。
- 5、宋之問と崔融は途中の経路と日時をほぼ同じくして流謫地へと向かっていた。蕪州黄梅県で寒食を迎え、彼らは詩の贈答をする。崔融の「和宋之問寒食題黄梅臨江駅」に「春分自淮北、寒食渡江南」という。平岡武夫編『唐代の曆』によると、神亀元年の春分は二月二〇日であるから、彼らが洛陽を発つたのは二月中旬であつたらうと思われる。
- 6、安東俊六「初唐詩の作者作品に関する異説について——宋之問の詩のばあい——」(『中国文学論集』第二号、一九七一年五月、九州大学)
- 7、宋之問に「至端州駅、見杜五審言・沈三佺期・閻五朝隱・王二無競題壁、慨然成詠」詩があり、五人がすべて端州を經由しているのがわかる。
- 8、九真山は湖北の漢陽の西南にあるものが有名であるが、この詩の冒頭に「大士生天竺、分身化日南」と言うところから、こ

の九真山は驩州の北隣の愛州九真県にあるものと考えられる。9、『唐会要』のこの記事は、『唐詩紀事』卷九「李適」の条の記事と、人名、ならびに大学士・学士・直学士の呼称の区別において、完全には一致しない。

10、この詩は一に広宣の作とする。広宣は中唐の詩僧であり、平野顯照氏は『唐代文学と仏教の研究』(昭和五三年五月、朋友書店)第四節「広宣上人考」で、疑問の余地を認めつつも、この詩を沈佺期の作ではなく広宣の作とされる。しかし、その根拠に確たるものはないので、本稿ではひとまず沈佺期の作品と見ておく。